Monthly Indonesia

Nov.2017 月刊インドネシア

11 月号





2018年日本インドネシア国交還立 60 周年を迎えます

一般財団法人 日本インドネシア協会

目 次

福田会長の	日本インドネシア友好親善訪問	問団・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
• 40 300	ネシア国交樹立60周年に向し (記念事業の認定申請 日本インドネシア国交樹立60周	のご案内等)・・・・・・8
	ンドネシアへのODA~イン: ト務省国際協力局国別開発協力第	フラ協力を中心に~・・・1 4 1 課課長 原 圭 一
	ネシア:イスラームとの関わ -葉大学名誉教授	り・・・・・・24 中 村 光 男
日本に飛来	したガルーダを訪ねてくその	59>・・・・・・・・3 1 諏 訪 隆 一 郎
	アルピアの旅(11)・・・・ インドネシアルピア誕生の歴史と	・・・・・・・・・・3 4 : 成長の歴史 吉 田 隆
月次リポー	ト 2017年10月・・・・	・・・・・・・・・・38 株式会社エヌ・エヌ・エー
事務局から		3 9
作者: 2017年7 が行われ、4 考を経て、10 2018年「 同口ゴはの日	69通の応募が寄せられました。ジ 0月19日にジャカルタにおいて両 日本インドネシア国交樹立60周年 ンドネシア・日本両国国旗の赤と白	子高校生17歳) ドネシア及び日本において一般公募 ジャカルタ及び東京での一次・二次選 「国の選考委員による最終選考を実施。

私のインドネシア:イスラームとの関わり

千葉大学名誉教授 中村 光男

Winds.

はじめに:インドネシア政府から文化功労賞を受賞

先日、『じゃかるた新聞』(2017年9月19日号)で 報道されましたように、私はインドネシア政府教 育文化省から、今年度の文化功労賞(Penghargaan

Kebudayaan)を戴きました。授賞の理由として、 三点が挙げられました。第一に、インドネシアの 文化、とくにインドネシアのイスラーム関する国際的理解に貢献したこと、第二に、インドネシア の社会科学の発展に寄与したこと、第三に、文明 間・宗教間の対話に積極的参加してきたことの三 点です。このコメントは、私の半世紀余に及ぶインドネシアとの関わりに関して、的確なご指摘と



文化功労賞を授与する教育文化大臣 ムハジール・ エフェンディ教授。筆者:右より2番目 (インドネシア教育文化省提供)

感じております。そこで、この三点に沿って、私の人生を振り返ってみたいと思います。

1.1970年、ジャワでインドネシアのイスラームに出会う



文化勲章受賞の故スジャトモコ博士の家族(ラトミニ夫人と娘さんニ人)と。筆者:右より筆者夫妻 (インドネシア教育文化省提供)

1970年博士論文調査のため、 初めてインドネシアに入りました。 しかし、当初の目的はイスラーム研究ではありませんでした。インドネシア科学院(LIPI)に、研究許可申請のために提出した研究テーマは「ジャワの伝統的都市社会の研究」でした。このテーマは、1963年、インドネシア大学のセロ・スマルジャ

[「]筆者プロフィル: 1933 年大連市生まれ。1952 年都立新宿高校から東大へ。1965 年東大大学院修士課程修了後、フルブライト留学生として渡米。1976 年コーネル大学博士号 (PhD) 取得。その後、アデレード大学、インドネシア大学、ハーヴァード大学、オーストラリア国立大学で、教育・研究に従事。1983 年より千葉大学教授、1999 年定年退職、名誉教授となる。2001-2003 年 JBIC 国際審査部シニア・アドヴァイザー。

ン教授(1915-2003) との出会いから温めたものです。同教授は『ジョクジャカルタにおける社会変容』という研究で、コーネル大学から博士号を授与されたインドネシア人最初の社会学者です。同研究は、スカルノ・ハッタとともに、独立戦争を戦った先代スルタン主導下で、ジョクジャ社会が大変革を遂げる過程を分析記述しています。私は当時大学院の学生で、イギリスのロナルド・ドーア教授(1925-)の「東京の下町研究」などに触発され、欧米流の近代化理論や都市化理論は、アジアの伝統的都市には通用しないのではないか、非西欧的近代化・都市化の道程があるのではないか考えていました。1963年、スマルジャン教授は、東京大学の中根千枝教授などが主催した国際会議参加のため来日し、著書を中根教授に贈りました。中根教授は、私に同書を渡し、次回のセミナーで報告するように命じました。スマルジャン教授の研究は、私の関心にピッタリでした。これが、私のインドネシアとの知的・人的遭遇の始まりでした。

1965年、私はフルブライト留学生として渡米し、翌年から、当時「インドネシア研究のメッカ」と言われていたコーネル大学大学院に移って、インドネシア語・ジャワ語の学習を始め、インドネシア研究に本格的に取り組み始めました。博士論文研究のテーマを巡って、いろいろと考えていた際、客員教授としてコーネル大学に滞在していたスマルジャン教授と歴史学者のサルトノ・カルトデイルジョ教授に相談する機会を得ました。両教授は、人類学的アプローチには、ジョクジャ郊外の「コタグデ」が調査地として適当だろうと示唆されました。コタグデ(Kota Gede = 「大いなる町」の意味)はジョクジャ・ソロ候地領の前身マタラム王国の発祥の地で、16世紀末から現代まで没落することなく存続してきた町でした。

1970年9月、私は、コタグデで家族(妻と子供3人)とともに現地生活を始めました。 スハルト大統領の「新体制」が始まったばかりで、庶民の生活は極めて貧しく、私の奨学金月 200ドルのうち、半分の100ドル(翌年分の奨学金は保証されていなかったので、残り半 分は貯めておく)で、女中頭兼料理番、女中(掃除・洗濯)、子守娘、水汲み男、さらに4人の 調査助手(地元大学生)を養う大所帯を賄うことができました。

初めのうちは、初期のテーマに従って、コタグデの歴史、行政組織、人口統計、土地所有、生業・経済、職業構成、家族親族関係、年中行事など、「民族誌」(エスノグラフィー)のためのデータ収集、インタビュー、現場観察などを行なっていました。その中で、このコタグデの伝統的社会を、独特の「近代化」に向かって動かしている人々に出会ったのです。それがムハマディヤー(1912年設立の改革派イスラーム社会運動)の人々です。個人として、これらの人々は、質素、倹約、正直、時間厳守、合理性、規則正しい生活、教育熱心を特徴とし、日常の礼拝は勿論のこと、宗教的義務を遵守して、ザカート(「宗教税」)による相互扶助・貧者教済、ワカフ(不動産寄進)、によるインフラ整備(礼拝所、学校、病院、孤児院、養老院などの建設)に励み、この運動によって、町の景観さえも、変わってきていました。

特に感銘を受けたのは、調査助手として雇った大学生の親たちの中で、銀細工の職人、パッサールでのバティク小売、田舎町への衣類行商など、極めて乏しい収入の中から、節約・貯蓄して、子供たちをジョクジャのガジャマダ大学や国立イスラーム高等学院(IAIN)にまで、進

学させている親がいることでした。しかも、この傾向が、ムハマデイヤーの人々の間では、例外ではないことも分かりました。マックス・ウェーバーの言う「プロテスタンテイズムと資本主義の精神」に対応する動きが、イスラームをコンテキストとして、このジャワの小さな町で、ホントに実現していると感じました。私の「イスラーム開眼」は、こうして、書物からでなく、現地体験を通して得られました。調査結果は1983年、ガジャマダ大学出版会から、The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town というタイトルで刊行されました。

2. 1970年代後半、インドネシア社会科学界で揉まれる



ムハマディヤー会長のシャフィイ・マアリフ教授と。筆者:右

コーネル大学で博士課程を終えたのち、南オーストラリアの州都アデレード大学に就職しました。しかし、大学や現地の環境にあまり馴染めず、悩んでいたところ、ジャカルタのスマルジャン教授より、発足したばかりの社会科学研究訓練プログラム(Program Latihan Penelitian Ilmu-Ilmu Sosial = PLPIIS)の手伝いに来ないかとお招きを受けました。このプログラムは、地域開発に必要とされる地方大学の若手研究者の集中的養成を目的とし、アチェ、ジャカルタ、マカッサル、ジョクジャ、

スラバヤなどの国立大学に付設された研修センターにおいて(各センター毎年10名の定員)、1年間、調査研究能力の向上を目指して合宿研修を行うものでした。私はジャカルタ・センターの「外国人専門家」(tenaga ahli)に任命され、所長のモホタル・ブホリ博士の下、2年間、全国各地から選抜された計20人の若手社会科学者と生活を共にしました。このプログラムは、フォード財団、カナダ IDRC、西独 W 財団などの助成を受け、スマルジャン教授を理事長として、クンチャラニングラット教授(人類学)、スジャトモコ博士(開発学)、サヨギヨ教授(農村社会学)、ミリアム・ブディアルジョ教授(政治学)、ムビヤルト教授(経済学)など、当時のインドネシア社会科学界の長老級の学者を理事として、運営されていました。地方からの研修生は極めて真面目で、熱心、モチベーション高く、後年、多くの研修生のB/OGが、学部長、研究所長、学長、県知事、各省研究開発所長・総局長、果は大臣にまで、出世しました。(2000年代初、JBICの「カントリー・リスク」調査で全国を回った際、このネットワークが大変役に立ちました。)

PLPIISで働くかたわら、在野の若手知識人との交流も深めました。特に、先駆的NGOとして、社会科学評論誌『プリスマ PRISMA』を発行していた LP3ES (Lembaga Penelitian, Pendidikan dan Penerangan Ekonomi dan Sosial =経済社会研究教育情報機構)に集う独立心、批判的精神に満ちた人々に、強く惹かれました。創立者のイスミッド・ハダッド、ダワム・ラハルジョ、そして、

寄稿者のアデイ・サソノ、ヌルホリス・マジッド、グス・ドウルなどに、出会い親しくなったのも、このLP3ESのシンポやセミナーを通してでした。先のPLPIISにおける長老たちと、このLP3ESに集う若手たち、すなわち世代を超えたインドネシア知識人の先端部分との接触を通して、インドネシアが「ポスト・スハルト」の動きを、知的に模索し始めている様子を、1970年代後半から、まざまざと体感いたしました。

1979年には、グス・ドウルの招きで、スマランで開かれたナフダトゥル・ウラマー (NI)の全国大会に参加・傍聴し、この「伝統主義的イスラーム指導者=ウラマー」組織の大衆的基盤は、全国数千のプサントレン (イスラーム寄宿塾)を拠点に、深く強固であり、必ずや、ムハマディヤーと並んで、インドネシアの将来を左右する勢力になるに違いないと確信しました。これ以後、5年ごとに開催されるムハマディヤーと NIの全国大会には、必ずお招きを戴いて、参加・観察することにしています。



グス・ドゥル (第4代大統領 アブドゥルラフマン・ワヒド) と 次女イエー と。 左より筆者夫妻

PIPIISの仕事を終えて、私はトヨタ財団の助成でオーストラリア国立大学の客員研究員になりました。そこで、東南アジア・イスラーム研究の大先達アンソニー・ジョンズ教授に会いました。ジョンズ博士が主催したイスラーム暦1400年記念の国際会議で、ハーヴァード大学のイスラーム学教授ウィリアム・グラハム教授と知り合いました。両教授とのディスカッションを通して、私のムハマディヤー研究が、国際的比較に耐え得ること、東南アジア・インドネシアのイスラームは決して「田舎イスラーム」、「周縁イスラーム」ではなく、アラブ・ペルシャ文明に匹敵するマレー世界独自のイスラーム文明であることを確信しました。グラハム教授の紹介で、1980年、ハーヴァード大学の世界宗教研究所で客員フェローとなり、学生に戻って講義・セミナーに参加し、欧米イスラーム学のエッセンスを、味わう機会を得ました。

1979年のイラン・イスラーム革命は、インドネシア社会にも大きな衝撃を与えました。スハルト大統領は「イスラーム復興」の機運を抑えようと、「パンチャシラ単一原則」をあらゆる政治、社会、大衆団体に押し付けました。デモ集会の弾圧、学生自治会の解散、流血の惨事が続きました。この中で、ムハマディヤー、NUなどは、「パンチャシラ単一原則」を国是として受け入れ、合法的存在を維持しました。他方、新体制発足以来の宗教教育の普及、中間層、特に知識層のイスラーム化などで、イスラームの社会的主流化の動きが止まることなく進行し、やがて、スハルト自身がこの動きに乗らざるを得なくなり、腹心のハビビ博士を通して、インドネシア・ムスリム知識人協会(IOMI=Ikatan Cendekiaan Muslim Indonesia)を組織、先に言及した知識人たちは、グス・ドウルを除いてほぼすべて、これに参加しました。

私は、1983年、18年に及ぶ海外生活を終えて帰国。日本の東南アジア地域研究の中でイスラームが抜け落ちているのを痛感して、妻の緋紗子とともに、今永清二さん(広島大)、西野節男さん(名古屋大)、多和田裕司さん(大坂市大)、利光正文さん(別府大)、床呂郁哉さん(東外大)、大形里美さん(九産大)、小林寧子さん(南山大)、川島緑さん(上智大)などに呼びかけて、翌年、東南アジア・イスラーム研究会を立ち上げました。

1980年代後半から1999年の千葉大定年までの間に、国際文化会館、学術振興会、文部省科研費、アジア経済研究所などの助成や協力を得て、東南アジア、特にインドネシアからのイスラーム指導者・知識人を日本に招聘することが出来ました。その中には、グス・ドゥル(NU総裁、第4代共和国大統領)、ムクティ・アリ(宗教大臣、ジョクジャ国立イスラーム高等学院学長)、ムナウイル・シャザリ(宗教大臣、ジャカルタ国立イスラーム大学



ジョクジャカルタのスルタン・ハメンケブォノ10世(中央)と、筆者夫妻。

教授)、アトー・ムザッキール(宗教省研究開発局長、ジョクジャ国立イスラーム高等学院学長、現国立コーラン博物館館長)、ヌルホリス・マジッド(パラマディナ大学創立者)、シャフィイ・マアリフ(ムハマディヤー会長、国立ジョクジャカルタ大学教授)、ハッサン・アンバーリ(インドネシア大学考古学教授、国立コーラン博物館館長)ハルワニ・ミフロブ(バンテン考古博物館館長)、モハマド・ソバリ(国営通信社アンタラ編集長、『コンパス』紙コラムニスト)などの各氏が含まれています。日本政府は、1990年初頃まで、「憲法上、政府は宗教に関与できない」という公式外交方針を堅持して、イスラーム関係者との接触を避けてきましたが、私は、民間外交・学術交流の次元で、インドネシア・東南アジアのイスラーム指導者・知識人と日本側の交流に努力いたしました。

3. ポスト・スハルト期における「市民社会」の国際的連帯

スハルト政権の倒壊、民主化の展開には、既存の政治勢力に加えて、「市民社会組織(civil society organizations))の役割が極めて大きく、その核として二大イスラーム組織 NU とムハマディヤーが活躍しました。転換期には、NU 総裁のグス・ドウルが、共和国 4代目の大統領となり、ムハマディヤー会長のアミン・ライスが、国権の最高機関である国民協議会の議長に選出されました。その後も、言論・結社の自由の保障によって、市民社会組織・NGO が多数結成され、民主化の下支えとして、国内政治の動きに、大きな影響を与えてきています。

さらに、特筆すべきは、先述の二大イスラーム組織が、世界最大のムスリム人口を擁するイ

ンドネシア・イスラームの代表的市民社会組織として、文明間、宗教間の対話と相互理解、国際的連帯の強化に、積極的に努力していることです。NUはインドネシア外務省と共催で、2004年から隔年ごとに、国際イスラーム学者会議(International Conference of Islamic Scholars = ICIS)を開催し、海外からイスラーム学者=ウラマーと非ムスリムのイスラーム研究者を招いて、9・11以後のイスラーム世界と欧米諸国の相互不信を克服し、宗教間・文明間の対話、紛争の回避・解決と相互理解促進の努力をしています。ムハマディヤーは、2006年から、マレーシアの華人組織「鄭和多文化教育基金(Cheng Ho Multi-Culture Education Trust)」と協力して、隔年に世界平和フォーラム(World Peace Forum)を開催し、世界宗教の指導者たちと世界各地の宗教・民族間の紛争当事者を招いて、紛争回避と解決の教訓と具体策を話し合っています。



NU とムハマディヤーの若手指導者と、右端は西沢利息東大教授。 左より筆者夫妻。

また、実際的な行動として、NUとムハマデイヤーは、それぞれ独自のアプローチと人脈を通して、タイ南部、フィリピン南部における中央政府と現地ムスリム住民との紛争の仲介を、長年にわたって試みています。最近では、ミャンマーのロヒンギャ・ムスリムと中央政府の紛争にも、インドネシア政府と協力して、仲介と難民支援の努力を行なっています。

NUとムハマディヤーは、ともに、「イ

スラームは神の宇宙・人類に対する愛の賜物=Rahmatan lil Alamin」という普遍主義の立場に立脚し、インドネシアを含む東南アジアの文化的多様性、民族間宗教間の共生と相互理解を前提としたイスラームを基本教義としています。近年、排他的イスラーム主義の台頭に対抗して、

NU は「多島海のイスラーム=Islam Nusantara」、ムハマディヤーは「進歩的イスラーム=Islam Berkemajuan」をスローガンとして掲げ、中庸、穏健、宥和、開明の漸進路線を、打ち出しています。私は研究者として、これらの動きに、参加・観察して学ぶとともに、インドネシア・イスラームの実相を、日本をはじめとして非イスラーム世界に伝える作業に従事しています。(1983年のムハマディヤー研究書の増補改訂した英語版を、シンガポールの東南アジア研究所=ISEAS から

Peluncuran Buku Mitsuo Nakamura

Kerna Univer Forgerhan Frant Maharmadrich Herde Noshiz berbannan despain pengeceng lodio Belaz Sake Teshi et Ann Pobre Beringan. Minus Noberman, Sake pedatrian Minus Lodio, seriodo di Katori Pf Sintaminadiyah. Dikarta Jumi Polita Falli Fali di Burri tersing pengeraken Muhammadriyah di Katapité Pf Muhammadriyah di Katapité Pf Muhammadriyah di Katapité Pf Sintamina tahun 1910-1920.



新著の出版記念会、ムハマディヤー会長ハエダール博士と。 2017/10/7 『コンパス』紙

2012年に刊行、さらに、そのインドネシア語版を、この度、Suara Muhammadiyah 出版社から刊行いたしました。)

昨年度からは、国際交流基金の新プロジェクト TAMU (Talk with Muslims)のお手伝いを始めました。このプロジェクトは、東南アジアのイスラーム社会で、様々な社会的活動に従事している青年男女たちを招いて、日本側の学生たちとの対話、地域社会の現地観察を通して、相互理解を深め、将来的に日本とイスラーム世界、特に身近な東南アジア・イスラーム社会と日本の架け橋の役割を担う人々を、互いに創り出して行こうという目的で、始められました。今後、同プロジェクトの進展に伴って、日本インドネシア協会会員の企業や個人の皆様に、いろいろとご協力をお願いすることがあろうかと存じます。その際には、よろしくお願いいたします。最後に、50年余りインドネシアとお付き合いしてきた感想ですが、一言で言うと、「まだまだ知らないことが沢山ある」という感じです。インドネシアは巨象です。私が知っているのは、まだその一部、鼻だけ、あるいは耳だけにすぎません。インドネシアほど、多面的な理解が必要な国、社会はないのではないかと思います。「知らないことが、まだ沢山ある」という自戒で、今後も、お付き合いを続けていこうと思っています。